

台北市立動物園における学び

哺乳類の保全の現状と新たな課題に関する報告

岩田 祐（ワイルドライフマネジメント事業部 広島事業所）

I. 導入：動物園訪問の目的と台湾の生物多様性保全

台湾は、その地理的・地形的な特異性から、多くの固有種を擁する生物多様性のホットスポットであり、これらの種の保全は世界的にも重要である。

2025 年 8 月に筆者はプライベートで台湾旅行に出かけた。この仕事をしている以上、動物園は旅先で外せないと感じ、丸一日（開園から閉園まで）かけて展示と向き合ってきた。

台北市立動物園への訪問を通じ、台湾の哺乳類が直面する絶滅の危機と、それを回避するための具体的な保全活動、そしてその先にある人間との軋轢について学ぶ機会を得た。本報告では、タイワンツキノワグマ、タイワンヤマネコ、センザンコウに焦点を当て、これらの哺乳類の現状と、保全戦略について記述する。（一部展示文章を機械的に翻訳しただけの不自然な文章があるがご勘弁願いたい。）

II. 各種の保全プロファイル

1. タイワンツキノワグマ：科学的保全の成功と人間との軋轢

タイワンツキノワグマ（*Ursus thibetanus formosanus*）は、台湾最大の陸生哺乳類であり、アンブレラ種として高地生態系において重要な役割を担う。余談だが学名の一部の *formosanus* は「台湾の」という意味であり、台湾に生息する昆虫や両生類爬虫類等の多くにこの名前が付けられている。さらに余談だが、*formosa* とはポルトガル語で美しいという意味で、かつてこの島を訪れ

たポルトガル船の船員が、緑に覆われた島を見て「Ilha Formosa」と呼んだことが起源だと言われている。

タイワンツキノワグマはかつて、人間活動の拡大による生息地の減少と、漢方薬等への利用を目的とした密猟で絶滅の危機に瀕していた。1989 年施行の野生動物保育法（WCA）に基づきタイワンツキノワグマは「絶滅危惧種」に指定され、その後は法的に保護されている。玉山国家公園では、糞や体毛等を非侵襲的な方法からサンプルを得、DNA によって個体を識別する技術を用いた長期的なモニタリングを実施している。その結果、個体群が高い遺伝的多様性を保ちながら増加傾向にあることが確認されており、科学的な手法による基づいた保全（Evidence-Based Management）の成功事例となっている。

現在のタイワンツキノワグマにとっての主要な脅威は、商業的密猟に加えて、イノシシなどを目的とした汎用的なわなによる錯誤捕獲である。クマがわなに誤ってかかる事例は絶えず発生しており、個体群の存続を脅かす重要な問題となっている。

現在では台湾全体のタイワンツキノワグマの個体数は 200 頭～600 頭（1,000 頭を超える可能性もあるそう）と推定されており、依然として少ないもののその個体群の回復と活動域の拡大によって、人間とクマ間の衝突（HBC）のリスクを増大させている。近年、クマが人里近くに出没し、農作物や養蜂場への被害が深刻化しており、政府は電気柵の設置支援や遭遇時の対処教育などを実施し、タイワンツキノワグマの保護管理は「共存社会の設計」という新たな段階の管理に移行して

いる。

2. 石虎(台湾ヤマネコ):低地の危機と経済・技術による共存戦略

石虎 (*Prionailurus bengalensis chinensis*) は、台湾ウンピョウ (*Neofelis nebulosa brachyura*) の絶滅後、台湾に現存する唯一の在来ネコ科動物であり、主に人間の居住域に近い低標高の里山地帯に生息している。台湾ウンピョウの絶滅は 2013 年に宣言されたが、このことは「遅すぎた介入」として野生動物の保全に関わる人々に色濃く記憶されており、同じネコ科である石虎の保全においては早期に最大の対策を講じることの重要性が説かれている。

石虎は低標高の里山地帯に生息しており、人間の生活環境と重複している。このことが石虎を取り巻く大きな課題となっている。石虎の生息地は人間の生活環境で分断されており、常にロードキル(交通事故死)のリスクに晒されている。また、石虎が家禽類を襲う被害が発生することで、農家による報復的な捕獲のリスクが高まる。また、農村地帯である故に農薬や殺鼠剤による二次中毒のリスクも高い。台湾ではそんな石虎が抱えるリスクに対し、経済、技術、社会システムを組み合わせた対策を推進している。

例えば「生態系サービス給付金プログラム」が導入されている。これは農薬や殺鼠剤を使用しない等、石虎の生息に配慮した農法を採用する農家に助成金を支給する仕組みである。これにより、石虎の保全を地域経済の利益に直接結びつけ、報復的捕獲の動機を減らすことに成功している。また、ロードキル対策として、市民科学(citizen science)と行政が連携し、ロードキルのホットスポットを特定し、その地点に生態回廊やアンダーパスを通すなどの道路工学的な対策を積極的に導入している。また、ロードキルのホットスポットのデータは車のナビゲーションシステムと統合され、ドライバーが当該の道路区間を走行する際、音声と画像で注意を促し、制限速度内での走行を

奨励するものであり、これらにより交通事故の防止が図られている。

2017 年の研究報告では、石虎の推定生息数は 468 頭から 669 頭程度とされ、楽観視できない状況が続いている。その中で石虎の保全は絶滅の危機にある野生動物を救うだけでなく、里山の生態系や経済活動にも深く関わっており、人間活動のためにもなる重要な取り組みとして位置づけられている。

3. 穿山甲:世界的成功の背景と国内のユニークな脅威

台湾センザンコウ (*Manis pentadactyla pentadactyla* 以下、センザンコウと言う) は、肉や鱗が伝統医学で使用されるために密猟の標的となり、IUCN のレッドリストで「絶滅寸前(Critically Endangered)」だが、台湾は強力な法規制と専門的な研究により、世界でも稀な保全成功例を収めており、その知見は国際社会に提供されている。

かつては組織的な密猟により台湾から国外へ大量に輸出されていた時代があったが、現在は台北市立動物園が保全の中心的な役割を担っている。20 年以上前から人工保育・繁殖に関する技術を世界に先駆けて開発しており、特に専用飼料の開発は、救護センターでのリハビリテーションにおいて重要な役割を果たしている。ワシントン条約等の国際的な仕組みにより密猟が沈静化した結果、センザンコウが直面する脅威はローカルな問題へと転換した。依然として、イノシシなどを対象とした汎用的なわなへの錯誤捕獲が外傷の主要因であることに加え、現在、センザンコウの生存を脅かす最も重大な台湾国内要因の一つが、野犬による捕食である。このことは、野生動物保全が公衆衛生や愛玩(伴侶)動物の管理といった異分野との連携を緊急に必要としていることを示している。一方で、台東県鸞山地区では、住民がセンザンコウを「地域の宝」として保護する地域主導の保全モデルも成功しており、地域社会の関与が保全の

持続可能性を支えている。

III. 結論と持続可能性に向けた展望(簡潔なまとめ)

台湾の哺乳類保全の課題は、絶滅の危機を乗り越える段階から回復した動物との持続可能な共存へと移行していることを知ったことが、今回の台北市立動物園での大きな学びである。

保全のために具体的に何をしたかについては引き続き勉強する必要があるが、保全の成功は科学

的データに基づくモニタリング、経済的インセンティブ、技術的な介入等、あるいはそれらの統合によって達成されてきた。今後、台湾ではタイワンウンピョウの絶滅という教訓を心に留め、クマの HBC 対策やセンザンコウの野犬対策等において、異分野、産官学といった連携が一層強化されるだろう。野生動物と人間社会が調和する共存社会を確立することが、今度の台湾の野生動物管理における重要な課題であると感じた。



園内の案内看板。日本人にも優しい。



解説は基本的に2言語（中文英語）。理解するのに時間がかかりました。